

平井一臣・土肥勲嗣編『つながる政治学〔改訂版〕』（法律文化社、2022年）

□おすすめの文献

▼第1章

井手英策『財政から読みとく日本社会—君たちの未来のために』岩波ジュニア新書、2017年

気鋭の財政学者が若者や初学者に向けて財政の考え方をわかりやすく説いた入門書。本章のテーマに関心をもった人は手に取って読んでみてほしい。

伊藤恭彦『タックス・ジャスティス—税の政治哲学』風行社、2017年

「税の正義」というテーマについて政治学の知見から本格的に切り込んだ文献。本章の内容に満足せず、より深く哲学的に考えてみたい読者にはこちらを推薦する。

齋藤純一『不平等を考える—政治理論入門』ちくま新書、2017年

不平等という社会問題に政治理論からアプローチした本。参考文献リストも充実しているため、本章のテーマをさらに掘り下げて、理論的に考えてみたい方にお薦めする。

▼第2章

前田健太郎『女性のいない民主主義』岩波新書、2019年

〈政治権力の担い手が男性に集中している現状を「民主主義」と呼べるのか〉と問いかけ、ジェンダーと政治の関係をひもときながら、権力、投票、政党、政策など政治学の基本的な論点についても丁寧に解説した一冊。

杉山文野『元女子高生、パパになる』文藝春秋、2020年

トランスジェンダーの当事者である著者が、自らの SOGIE への葛藤だけでなく、働くとは、コミュニティとは、家族とは……と様々な思考をめぐらして自分らしさを見つけていくノンフィクション。

エマ・ワトソンの国連でのスピーチ動画、2014年9月 <https://www.youtube.com/watch?v=jQbpLVI6DwE>

国連の UN Woman 親善大使として、ジェンダー平等がすべての人にとっての平等につながることを、穏やかにかつ力強く伝えたメッセージ。

▼第3章

今井照『地方自治講義』ちくま新書、2017年

東日本大震災と福島第一原発事故の著者自身の経験も踏まえ、自治と自治体の原点に立ち返りながら、日本の地方自治の歩みと現状、今後の課題をわかりやすく解説。本書を通して日本の地方自治の全体像を考えてみよう。

チューリップテレビ取材班『富山市議はなぜ14人も辞めたのか—政務活動費の闇を追う』岩波書店、2017年

しばしば報じられる地方議員の不正腐敗。なぜ起こるのか、起こらないようにするにはどうしたらよいのかを、具体的な事例を通して考えてみよう。

平井一臣『首長の暴走—あくね問題の政治学』法律文化社、2011年

ポピュリズムの問題は、トランプ大統領の当選を契機に世界的にも注目されるようになった。なぜポピュリズムの政治が登場し、そこにはどのような問題がはらまれているのか。日本で実際に起きた出来事を通して考えてみよう。

▼第4章

ジョン・ミッチェル(阿部小涼訳)『追跡 日米地位協定と基地公害—「太平洋のゴミ捨て場」と呼ばれて』岩波書店、2018年

米軍による放射性廃棄物やPCBなどの有害物質汚染の実態を、沖縄を含む在日米軍基地のみならず、米国内土の基地の実地調査や情報公開法にもとづいて収集した機密文書の分析を通じて明らかにしている。

山本章子『日米地位協定—在日米軍と「同盟」の70年』中公新書、2019年

日米地位協定の成立過程やその課題を、安保や沖縄返還をめぐる日米交渉、日米間にける非公表の合意議事録の存在とその問題点、ドイツ・イタリアの地位協定の状況を織り込みながらも、わかりやすくまとめている。

野添文彬『沖縄米軍基地全史』吉川弘文館、2020年

沖縄米軍基地の形成過程を通史的にまとめたもので、沖縄戦、日米安保、沖縄返還交渉、普天間・辺野古問題についての概説的事項を満遍なく知ことができる。

▼第5章

山本義隆『近代日本—一五〇年—科学技術総力戦体制の破綻』岩波新書、2018年

核の問題は科学技術の問題であると同時に社会の問題でもある。なぜ2011年に福島第一原発事故が起こったのか？日本の科学技術と日本社会の歴史的变化との関連から考えてみよう。

山本昭宏『核と日本人—ヒロシマ・ゴジラ・フクシマ』中公新書、2015年

「核の軍事利用」と「核の平和利用」の2つが、戦後日本の歴史のなかでどのように相互に関連しながら変化し今日に至っているのかをわかりやすく説明している。

堀川恵子『原爆供養塔—忘れられた遺骨の70年』文春文庫、2018年

一人ひとりの被爆者ごとに、それぞれの体験と戦後の歩みがある。本書もまた、丹念な取材を通して一人の被爆者の戦後の歩みを伝えている。

▼第6章

上村雄彦・首藤信彦・内田聖子ほか『自由貿易は私たちに幸せにするのか?』コモンズ、2017年

主に市民社会の立場から自由貿易の問題を考えた書籍。TPPを含む自由貿易協定や租税回避地(タックスヘイブン)などの自由貿易の仕組み全般を取り上げ、多国籍企業中心の貿易ルールの問題を検討している。

ダニ・ロドリック(柴山桂太・大川良文訳)『グローバリゼーション・パラドクス—世界経済の未来を決める三つの道』白水社、2014年

現在の世界情勢は、グローバル化と国家主権、民主主義の3つの同時追求が困難となり、どれか1つを

犠牲にするトリレンマを強いている。著者は、国家主権と民主主義を擁護して、急速なグローバル化の抑制を提言。

マンフレッド・B・スティーガー（櫻井公人・櫻井純理・高嶋正晴訳）『新版 グローバリゼーション〈1冊でわかる〉』岩波書店、2010年

経済や政治にとどまらず、文化、環境、イデオロギーまで含む多元的な社会的変容の過程としてのグローバル化を平易に解説。複雑でとらえどころのないグローバル化を知るための手がかりになるだろう。

▼第7章

吉田裕『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実』中公新書、2017年

筆者は、長年アジア・太平洋戦争について研究してきており、本書では、「兵士の目線・立ち位置」から凄惨な戦場の実相や日本軍兵士が直面した過酷な現実が描かれている。

内海愛子『戦後補償から考える日本とアジア〔第2版〕』山川出版社、2010年

アジアの人々に対する戦後補償問題についてわかりやすくまとめたもの。日本国内における戦後補償問題については、栗原俊雄『戦後補償裁判—民間人たちの終わらない「戦争」』（NHK出版新書、2016年）を読んでほしい。

大澤真幸・姜尚中編『ナショナリズム論・入門』有斐閣、2009年

ナショナリズムは現在の政治について考える際に欠かせないものである。本書はナショナリズムについて多様なテーマから説明を行っている入門書である。

▼第8章

アレクサンダー・C・ディーナー、ジョシュア・ヘーガン（川久保文紀訳）『境界から世界を見る—ボーダースタディーズ入門』岩波書店、2015年

ボーダースタディーズに関して日本で初めて出版された体系的入門書。ボーダーの理論や歴史だけでなくアクチュアルなニュースも織り交ぜており、初学者にも読みやすい。

岩下明裕『入門 国境学—領土、主権、イデオロギー』中公新書、2016年

日本におけるボーダースタディーズ第一人者による入門書。日本の国境・境界地域の現状分析をもとに、国境の畏、領域の畏を乗り越えようとする筆者の実践的、学問的格闘にぜひ触れて欲しい。

岩下明裕編著『ボーダーツーリズム—観光で地域をつくる』北海道大学出版会、2017年

国境や境界を資源と捉え、観光で境界地域の発展をめざすボーダースタディーズ研究者による実践的取り組み。本章で触れた対馬・釜山に加え、八重山・台湾、稚内・サハリンでの取り組みも紹介されている。

▼第9章

丸山眞男（古谷旬編）『超国家主義の論理と心理 他八篇』岩波文庫、2015年

日本ファシズムを知るための歴史的な論文集。丸山政治学を知るのにコンパクトな一冊。

篠原一『市民の政治学—討議デモクラシーとは何か』岩波新書、2004年

公共や「熟議デモクラシー」をさらに知りたい人のための入門書。

宇野重規『民主主義とは何か』講談社現代新書、2020年

平易な言葉で民主主義の歴史と本質とを教えてくれる入門書。

▼第10章

加藤秀治郎『日本の選挙—何を変えれば政治が変わるのか』中公新書、2003年

日本の選挙制度の特徴や課題をわかりやすく説明した後、選挙制度に関する議論の問題点を指摘している。そのうえで、選挙制度の思想的・歴史的背景にまで遡って検討することの重要性を強調している。

ジェラルド・カーティス（山岡清二・大野一訳）『代議士の誕生』日経BP、2009年

アメリカ人研究者がある政治家に密着取材し、政党や後援会などの実態を描き出している。初版は1971年であり、現在とは異なる面もあるが、政治家が当選するためにどのような活動をしているのかを知ることができる。

山田真裕『政治参加と民主政治』東京大学出版会、2016年

投票だけでなく、様々な形態の政治参加について、現在までの研究をコンパクトにまとめている。とりわけ、国際的な比較から客観的な根拠に基づいて、現代日本における政治参加の特徴と課題が検討されている。

▼第11章

清水真人『財務省と政治—「最強官庁」の虚像と実像』中公新書、2015年

様々な政策課題をめぐる与党と財務省との関係について描写している。同じ著者の『消費税—政と官との「十年戦争」』（新潮文庫、2015年）も参考になり面白い。

早川誠『代表制という思想』風行社、2014年

民主主義について考える際に、ぜひ手に取りたい一冊。現実政治の動きを追うジャーナリストの本も面白いが、政治のあり方を自分の頭で考えていく政治学の本もスリリングだ。

棕野美智子・田中耕太郎『はじめての社会保障—福祉を学ぶ人へ〔第18版〕』有斐閣、2021年

社会保障制度の仕組みや全体像をわかりやすく解説したテキスト。制度が改正されるたびに改版されているので、最新の情報を知ることができる。

▼第12章

マキアヴェリ（池田廉訳）『君主論〔新版〕』中公文庫、2018年

「近代政治学の祖」マキアヴェリの主著。実践の学（技術）としての政治、政治（学）のエッセンスが論じられている。

高島通敏『政治学への道案内』講談社学術文庫、2012年

政治学の広範な領域を網羅。政治に対する主体的関わりを論じた政治学を展開。

川崎修・杉田敦編『現代政治理論〔新版〕』有斐閣、2012年

政治理論における最先端の議論を、わが国第一線の政治理論研究者たちがコンパクトに解説。